

学会事務局 東京都杉並区善福寺2-6-1 東京女子大学松沢研究室気付 電話 03-395-1211 郵便振替 東京8-117184  
西日本事務局 大阪府高槻市日向町7-15 島和博気付 電話 0726-76-2549

## 第二回総会・研究



第一二回総会公報報告

### 被差別空間としての

### 寄せ場を考える

「日本寄せ場学会」は、去る4月2日、3日、京都大学楽友会館において、第二回総会を行いました。本大会にも設立大会と同様、「寄せ場」に思いをよせる多くの人々や、「寄せ場」で闘う活動家など、総勢七五人（延べ）が結集し、京都部落史研究所の師岡佑行氏による記念講演会、並びに四本の研究発表が行なわれました。

まず、京都の「日雇労働者の人権と差別を考える会」の川田氏よりアピールをいただきました。京都では、行政の側は手帳のしめつけなどを強化してきて、闘いの拠点がないというのが現状であるが、「水溜まり」のような「寄せ場」がある。飯場が数多くあり、その中には暴力飯場のようなケタオチ飯場も未だに存在している。飯場の状況もきちんと調べていかなければならないと考えているが、まだ仲間が少なく、十分に運動が展開されていない。今後は、拠点づくりを中心に運動を展開していきたい、とのことでした。

つぎに、運営委員長の池田浩士氏の挨拶がなされました。寄せ場学会が昨年誕生してからこれまで一年間は、本当によちよち歩きの状態で、試行錯誤を重ねながら、ある意味では試行よりも錯誤のほうが多い状態で活動を行なってきた。この第二回総会を足場として、本年度の本格的な活動をしていきたいと決意している。今後、日雇労働者、飯場労働者、野宿労働者等の友人とのより強いきづなを作りたい。新しい「寄せ場学」というものは、単なる理論的操作に終わることなく、現場で日々闘っている労働者との相互批判をますます緊密にしていくことによつて、理論と実践との結合を目指していきたい、と提起しました。

つづいて、事務局長の松沢哲成氏より一九八七年

度の財政報告並びに活動報告が、編集長の加藤晴康氏より年報『寄せ場』に関する報告がなされ（別項参照）、会場の拍手によって承認されました。

そのあとの近代京都における被差別部落の歴史と部落解放運動の現段階」と題した師岡佑行氏の講演は、予定時間を大幅にうまわる3時間余りの熱演でした。内容を要約する紙数もないので、最も興味深かった点だけを書きことにします。師岡氏は、

一九二〇年代の京都の歴史的考察をもとにして、京都の日雇労働者の多くが在日朝鮮人によって構成されていたことを指摘し、これらの朝鮮人が京都のスラムを形成していったと述べ、その形成の特徴を示しました。当時の京都の在日朝鮮人によって形成されたスラムには被差別部落以外の河原等に形成されたものがあつたが、一九三〇年代の京都市の調査によれば、在日朝鮮人の多く居住していた地域は、いずれも被差別部落のあつた地域であることが示されました。この指摘は、私たち「寄せ場」を研究していくものにとつて、明治近代以降の被差別部落と「寄せ場」との関係を考察していくうえで、非常に興味深いものです。

つぎに、日本解放社会学会の福岡安則氏よりアピールを受けました。群馬県の桐生や新潟県の神林のように、同和対策が法的には一八年間行なわれながら、実際には全く切り捨てられてきたようなところへの、東日本部落解放研究所の取り組みを、私たちも共有しています。東日本では、すべてではないせよ、関西的状况からすると二〇〜三〇年遅れた部落解放運動の闘いの現状があります。これまでの関西の運動の中のプラスとマイナスに学びながらやっていきたいので、神林と桐生の闘いにも注目してください。寄せ場学会と解放社会学会、兄弟学会としてともに手を携えてやってきましょう、というたいへん

ん力強い呼びかけがなされました。

それから、山谷争議団医療班の山岡照子氏より、労働者の命を守るために一刻でもはやく山谷に労働者福祉会館が必要であり、そのためにカンパを要請したい旨のアピールがありました。

このあと、第一日目の研究発表に入り、まず釜ヶ崎資料センターの平川茂氏が、「問題」としての日雇労働者・大阪市社会部「日雇労働者問題」をめぐって報告しました。大阪市社会部「労働調査報告」二十六輯「日雇労働者問題」（一九二四）において、その調査スタッフが日雇労働者を「生存競争上の劣敗者」とみなしていることを指摘し、このような日雇労働者観は、その根が明治期以降の都市下層社会論の中にあることを、隅谷三喜男・鈴木梅四郎・横山源之助等の著作によって示しました。これらの「克服されるべき」日雇労働者像にもかかわらず、日雇労働者が明治以降の日本の労働者構成の大きな柱であつたことを示し、その否定的な日雇労働者観は、（一）「貧民」蔑視、（二）近代的能力主義、（三）「前期的プロレタリア」という三つの観念が一緒になることによって形成されてきたのではないかと提起しました。そして、最後に狭義の「組織化されていく」近代プロレタリア」によって、単に「克服される」だけの日雇労働者ではなくて、近代プロレタリアの弱点をも批判していく力量を持つ日雇労働者像を形成していくことが今後の課題であり、そのためには日雇労働者「前期的（あるいは半）プロレタリア」という枠組みに対して、「プロレタリアの原像」としての日雇労働者像を歴史の中に確定していく作業が必要ではないか、ということが提起されました。

この平川報告に対して、松沢氏（歴史学）より、（一）まがりなりに労働運動の先駆者である横山

源之助と大阪市社会部の役人の行なつた調査報告が基本的に一緒である（ともに「日雇」差別である）ということはいかかなものか、（二）「前期的プロレタリア」とか「半プロレタリア」という規定と「プロレタリアの原像」という規定との関係を明確にしてほしい、という質問がなされましたが、時間の関係上第一日目の報告の論議は明日に持ち越すということになりました。

つづいて、釜ヶ崎資料センターの牛草英晴氏により釜ヶ崎における労働者増加の構造」と題した発表がありました（年報『寄せ場』所収の牛草論文「釜ヶ崎労働者増加の実態とその構造」を参照）。近年釜ヶ崎では、「ドヤ」のビジネスホテル化等様々なところで大きく変化したといわれるが、中でも注目すべきは釜ヶ崎労働者が急増したことである。釜ヶ崎の正確な人口を把握することは非常に困難であるが、最も参考になるのは日雇労働者被保険者手帳（白手帳）の登録数であり、釜ヶ崎では八四年以降白手帳所持者が急速に増加してきている。これに関して、行政サイドから「八四年九月から一級の保険給付金（アプレ手当）が4100円から6200円に引き上げられたことによる」という情報が流されているが、手帳所持者の増加をそれだけでは十分に説明することはできない。牛草氏は「八六〜八七釜ヶ崎労働者職歴調査」を参考として、白手帳保持者の増加が単にアプレ手当の引き上げにあるのではなく、一般労働市場の高失業率と釜ヶ崎の求人増が、「寄せ場」に労働者を吸引したことによって、釜ヶ崎の労働者人口自体が増加した結果にあるのではないかと結論づけました。

## 学問は寄せ場に

何をしてきたのか？

第二日目は、最初に松沢氏により一九八八年年度の活動方針案と予算案が提案され、会場の拍手によって承認されました(別項参照)。

つぎに、洪性鎮氏が「フランスにおけるアルジェリア移民労働者の現状」産業社会におけるそのステイグマ性とは?」を発表しました。安価な労働力として旧植民地から移入された、アルジェリア移民をはじめとする外国人労働者とその二世たちが、失業問題の深刻化しているフランス社会のなかで、増幅される社会的な差別の状況におかれ、産業社会の安全弁として機能すべく再生産されていることが、マスコミや具体的な数字の資料を用いて示されました。先進国における外国人労働者問題は、一般によく論じられるように、単に旧植民地とその宗主国との歪んだ政治経済関係としてのみ、とらえられるだけではない。近代産業社会と前近代社会における物質的な時間消費の異質性が、フランスにおけるアルジェリア移民のステイグマ性(差別)を生み出しているということも踏まえなければならない、と提起しました。

このあと、山谷争議団の新堀昂氏より、五年目に突入した金町一家との闘争の経過と現状に関するアピールがあり、現実の「寄せ場」の闘いに役立つ知恵を提供してほしい、と学会に対する多大なる期待と要望がよせられました。

さらに、和田研三氏(『元氣マガジン』)よりこの三月一四日から一九日に行なわれた「釜ヶ崎労働ゼミ」報告がなされました(別項参照)。

つづいて、西沢昇彦氏(社会学)が、昨年度の学会事業(山谷「地域住民」調査)の報告を行ないました(年報「寄せ場」所収の西沢論文「山谷町内会住民の意識調査・中間報告」を参照)。これについては近く詳細な報告書が出される予定です。

このあと、昨日の報告を含めて一括論議が行なわれました。以下、主な論議の内容を報告者別に簡単に書きとめておきます。

平川報告に関して、松沢氏は、横山源之助は少なくとも日雇労働者の立場にたつて運動を起こしているという視点があり、その日雇労働者観自体には問題はあるにせよ、それは運動の枠組みのなかで論議される問題であり、スラムクリアランス等の社会政策を目的とした大阪市社会部の調査報告と同列の問題として論じられるべきではない、と主張しました。これに対して、島和博氏が、平川氏の提起した問題は、(大阪市社会部の調査にみられるような)差別的な日雇労働者観が、案外、これまで進歩的なものとみなされてきた著作の中にもあり、それらの差別観がどこから生みだされるのかを追求することであると述べ、平川氏もほぼ同様の答えを行ないました。また、加藤氏(西洋史)は、横山源之助の評価は日清戦争以前の歴史的な社会状況を踏まえてなされなければ誤ったものになる、と指摘しました。

中山幸雄氏(日雇全協)は、役所が行なつた調査の中の日雇労働者観は最初から前提から間違っているので、このような方法をこねくりまわしたところで「正當なものとして評価される日雇労働者像」は出てこない、結局は、調査資料にたいする自分自身の判断基準を明示しなければならぬ、と意見を提出しました。さらに、松沢氏は、島氏および平川氏の主張に対して、大阪市社会部調査報告にはデータとしてプラグマティックに使えるものがあるわけで、それを我々がどうつかつていくかということが問題であり、そのどこに差別的な記述があるのかということを探さうなことは意味がない、と反論しました。また、池田氏(ドイツ文学)は調査にのぞ

む視点と調査の結果には密接な関係があり、全く視点の異なる横山と大阪市社会部の調査を安易に結び付けることは問題ではないか、と指摘しました。

洪報告に対しては、加藤氏が、前近代と近代の時間消費の異質性が差別を生み出すという二分法ではなく、近代産業社会が移民労働者をどのように組み込んでいくのか、という構造の問題も含めて考察するべきだ、と指摘しました。また、新堀氏は、移民労働者が階級闘争の重要な担い手になっていることを見逃してはならない、と述べました。

小倉利丸氏(経済学)はプラグマティックに資料を扱う際の視点・方法の論議がもつとなされるべきではないか、K・ポランニーに依拠した洪氏のような前近代に対する思い入れは問題ではないか、そして今後マルクスの差別的なルンプロ規定の問題を理論的に寄せ場学会で議論していかなければならないのではないかと、という感想を述べました。

三役、運営委員会への立候補者がなかったため松沢氏より、今年度人事案が提出され、拍手で承認されました(内容は別記)。つぎに、松繁逸夫氏より「第二回総会特別決議」が提案され、承認されました(内容は別記)。最後に、池田氏の挨拶をもって、第二回総会は終了しました。

こうして日本寄せ場学会の二年目の活動が開始されました。私たちが試みる「寄せ場」と「学会」というじつに奇妙なミスマッチは、毎大福のような意外性をもつた絶妙なミスマッチとしての結果を目指して、私たちの試行錯誤は今後も続けられるでしょう。何よりも私たちの原点である「寄せ場」の闘いの中に学び、「寄せ場」研究を「寄せ場」に生きる人々に投げ返す」という初心を忘れることなく、新たな活動を展開していこうと思ひます。



## 第二回總會特別決議

「日本寄せ場学舎」は、東京・山谷の地において日雇労働者の権利を守り、その拡張のために闘い続けている山谷争議団と、天皇と「日の丸」を掲げ、暴力で労働者を支配し暴利をむさぼらんとした山谷争議団に闘いかかった天皇主義右翼暴力団「国粹会・金町一家」との闘いの最中に結成された。

本学会の結成の最初の立案者であった山岡強一氏は、映画「山谷―やられたらやりかえせ」の監督佐藤満夫氏が、撮影現場で金町一家西戸組の刺客によって命を奪われた後を引き継いで映画を完成させた。だが、彼もまた金町一家の刺客によって、「日本寄せ場学舎」の創立に立ち会うことなく、その生を無理矢理閉じさせられたのである。

もとより、本学会は山谷の地において、あるいは釜ヶ崎や寿・笹島などの「寄せ場」において、直接に闘争を担うものとして結成されたものではない。「文学―科学研究は、寄せ場の仕組みを見通すことができるか、寄せ場を生きた人間の重さに答えることができるか、寄せ場が提起する思想を対象化することができるか、そして寄せ場に何かを投げ返すことができるか、そもそも寄せ場とはいったい何か、寄せ場労働者とはだれか、寄せ場の抑圧の意味とは何か、そして寄せ場の希望とは何か……」の問いを共通の課題として「まず、寄せ場研究に携わる者、関心を抱く者が、ともかくにも一堂に会すること……寄せ場を憂い、寄せ場に魅せられた研究者の切瑳琢磨の場」（創立よびかけ文）として結成されたものである。

しかしながら、結成とこの一年の活動は、二人の死とそれを痛苦の思いで乗り越え、闘い続けている日雇全協の力とそれを支えている「寄せ場」労働者に貼いられた所作であることは各会員の認めるところであろうと思う。

二年目の一歩を踏み出すにあたり、「寄せ場」への熱い連帯の思いを再度確認するとともに、その思いの背景にあったものをより明確に見つめなおさなければならぬ。

この一年の間に思想・言論の自由に対する攻撃は激化している。連続してい

る朝日新聞社に対する襲撃は、朝日新聞の「反日言論」を物理力と古き良き日本天皇の力を借りて封じ込めようとの意図でなされている。沖縄においては皇族警備の名のもとに法を無視した弾圧が警察と民間団体が一体となった形でおこなわれた。そればかりではなく、沖縄の歴史とウチナンチュウの意志を無視した日の丸強要に抗議した行動は、日の丸を掲げる右翼の暴行にさらされ、チビチリガマの像は破壊された。また、日本赤軍関連を名目になんの根拠もない家宅搜索令状が発行され、全国的に多数の人々を対象とした警察による思想的根拠もなく民族差別を煽る大キャンペーンが展開され、在日朝鮮人子女に対する卑劣な暴力事件が続発していることも、きわめて異常な事態と言わざるをえない。

我々が関心をよせる「寄せ場」では、思想・言論の自由に対する攻撃に先行し、あるいは相刺的に差別・襲撃事件が頻発している。山谷においては青少年によって野宿を余儀なくされていた労働者に暴行が加えられ、道行く労働者が刺されるといふ連続した事件がおこり、円高不況の名のもとにおこなわれた企業の過剰防衛的といえる合理化という名のクビ切りによって反発された労働者の増加によって、労働者人口が急増した釜ヶ崎においては、見掛けの好況の影で、高齢・病弱の労働者が野宿を余儀なくされ、山谷と同様に若者たちの襲撃にさらされている。

これらに共通するものは、「良き日本文化」天皇」という一色の価値観を掲げ、他の価値観を物理力と恐怖で押し拉がんとする傾向である。であるがゆえに、これらの思想と言論の自由を掛けられた攻撃は、天皇主義右翼暴力団と闘い続ける寄せ場労働者に熱い連帯の思いを寄せ、「寄せ場」の現実と各自の思想をよりどころとしての新たな価値観の創造によって、既存の価値観に言論による闘いを開始せんとする我々に掛けられた攻撃でもあると認識せざるをえない。

「日本寄せ場学舎」に集う我々は、二年目の第一歩をしるすにあたり、かく宣言する。

これら一連の思想・言論統制策動に断固として抗する姿勢を満天下に示し、日常の生活・研究・言論活動において退却せざることを。

「寄せ場」の現実に依拠し、言論による戦線を展開することを！

一九八八年四月三日

# 「釜ヶ崎労働ゼミ」の報告

## 和田 研三

今回の労働ゼミの目的は、擬似的日雇労働体験を得ることにあつた。

朝は五時に起き、寄せ場である「あいりん総合センター」の一階フロア周辺から手配師の車に乗りこみ、一次ないし二次の人夫出し飯場を経て就労する。夕方四時半から五時あたりで仕事が終わると、最初の飯場に戻って賃金を受けとり、電車に乗って釜ヶ崎に帰る。白手帳への印紙の貼付を除けば、釜ヶ崎に生きる労働者の一般的な日常を、夕方までは模倣する。

釜ヶ崎に帰ってからは、地域内のメシ屋で夕食をとり、午後八時からの学習会に備える。日雇労働者・釜日労役員、支援のキリスト教関係者を講師に招いた学習会では、釜共V時代から現在に至るまでの労働の問題、近世・近代を貫く釜ヶ崎の歴史、結核・行路病死・ケタオチ病院などの福祉と医療の問題、酒・キャンブル・ドヤ・アプレ手当など生活面の現状——といったテーマが、四度にわたって語られた。いずれも貴重なレクチャーであり、その内容は録音テープを起こしたものによつて全体化されることになつてゐる（未確定）。

さらに第三日目（一七日）には、京都府宇治市の暴力飯場に対する団交へ、釜日労および日雇労働者三十数名とともに参加する機会を得た。最近の釜ヶ崎では飯場争議自体が僅少であり、ましてこの飯場は天皇主義右翼ヤクザの体質を表に出していること

もあつて、労働者のあいだから「いまどき、貴重な存在、やで」の声が聞かれた。

ところで、こうした体験が、なぜ釜寄せ場Vを生みだそうとする者に必要なのだろうか。ひとこと言えば、労働を基軸にした視点を獲得するために、ということだろう。西日本支部の会員を中心に送られた、労働ゼミへの参加を呼びかける「労働ゼミ（案）」には次のように記されている。

「『日雇い』という雇用形態、就労にあつて必然化されている人夫出し・手配師の介在、現場における現場監督などとの不明確な位置関係などが労働者の中に刻印するもの、それらにとりこまれ反発する労働者の姿として様々な生活・行動上の現れを見ることが、それが、労働を基軸にした視点であろうと思う。」

資料や、さらには聞きとりですら伺い知ることのできない寄せ場——飯場——現場の空気を知ること、空気のなかに身をおくこと、その空気に生きる労働者の在りようを感知すること——それらについては、参加者は個々にいろいろなものを受けとつただろう。が、釜会Vが取りくんだものとしての労働ゼミの成果はどんなものだったのか、と問われると、いまの時点ではまだ威勢のいい答えを出すことができない。

まず、いかに擬似的Vとはいへ、量的な意味で不十分だったのではないか、擬似的体験Vにすら、

なりえていなかったのではないかという問題がある。就労予定は、労働ゼミの初日と最終日を除いた正味四日。内一日は雨天で就業せず、もう一日は全員が飯場争議に参加した。つまり、二日働いた者が最多就業日数者というわけだ。なにより、就業を予定して参加したものが六人しかおらず、この六人による就業延べ日数は、わずか八日にすぎなかつた。

そしてまた、体験の質の問題も重要だ。それは、この体験をいかにして共有化するのか、という問題におきかえることができる。

労働を基軸にした視点を獲得しようと寄せ場から就労しても、それが個人の体験にとどまるかぎり、個人の研究なり取材なりの対象を肉付けするというような形にしか、その体験はいかされようがないのではないか。それは旧来の研究スタイル、取材のスタイルを踏襲するものではないか。これでは労働ゼミの意義が、「寄せ場の真実に具体的につながる」とを確認しただけということになつてしまふ——それはそれで重要だが——。

寄せ場を考へるうえで、実際の就労には、わたしたちが現在の時点で想像しうる以上に大きな意味があるにちがいない。けれども、寄せ場を、ときの世情に迎合的に報道する手合いのジャーナリズムや、社会病理学なり何なりの研究対象として固化してしまふアカデミズムですら、必要に応じて現場を体験するだろう。もちろん、寄せ場学会の体験は、それらとは質を異にするものであるはずだ。しかし、体験の質がいかなるものであるかは、順番が逆だと言われそうだけれど、その体験がいかなる形でいかされていくかに関わってくるのではないか。そのいかしかたの最初にくるのが、日雇労働者や非参加者を当然含めた、相互検証と共有化なのではないか。

### 「見え」ない人間の現実を知る



外国人労働者の問題が顕在化するサラリーマンの出身地が  
 して居る。彼らが出陣労働に向く問題になる一方、このような  
 かかるを避けるような仕掛け「見え」ない人間の「見え」な  
 は同時に「見え」ない人、い、毎々が「見え」ない、  
 間」にしてゆく仕掛けもある。自問の「見え」ない、

5月2日 朝日

「日本の下層社会」であり、その「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 「収斂」を別名に用いた。その「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 まな仕掛けがある。「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 現実」(1)の「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 開放」(2)の「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 け返すことを見せつけて昨年発、その「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 足した日本寄せ場学会、その「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 関係として創設された「寄せ場」(3)の「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 提言(日本寄せ場学会発行、現、その「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、  
 代野野亮・一八〇〇頁)の「見え」ない人間の現実を知る。また、痛かき、世が「見え」ない、

# 労働に拘束される労働者

## 小倉利丸

第二回の寄せ場学会で発言したことについて、簡  
 単にメモ書き風になるけれども書いておきたい。

### 一、調査・データ、研究対象と研究者、とい う問題について

「寄せ場」の実態を知るために、調査とデータの収  
 集は欠くことのできないものであることは言うまで  
 もない。しかし他方で、調査とデータをどれだけ積  
 み重ねれば「寄せ場」や下層プロレタリアートの実態  
 により接近できるのか、という点については必ずし

もはつきりしない。このことはもっと極端な言い方  
 をすれば、文学的な表現や「寄せ場」労働者の個人史  
 的な記述と、通常「客観的」といわれる方法で収集さ  
 れたデータや調査によって描き出された「寄せ場」の  
 像とのどちらがより「寄せ場」の実態に近いものな  
 のか、あるいは両者の方法の違いを認め、どちらか  
 に優劣があるとする方法を退けたとして、では両者  
 はどの様に相互の認識を補うものなのか。「寄せ場」  
 への接近の方法は、同時に、社会科学が当然のこと  
 としてきた客観的な対象分析の方法を再検討するこ  
 いう課題をどこかでくぐらねばならない。

客観的な調査・データというものは、二重の意味  
 で疑問符をつけておく必要がある。第一に、調査や  
 データ収集の意図や視角は、調査主体の問題意識と  
 不可分であるから、調査・データの存在それ自体が  
 すでに一つの傾向性、イデオロギー性を帯びる。「寄  
 せ場」労働者の管理のためか、ドヤの「クリアランス」  
 のためか、それとも労働者の搾取実態を明らかにす  
 るためかによって、何をどのような方法で調査する  
 かは異ならざるをえないだろう。第二に、調査やデ  
 ータの読み方の問題である。行政側の管理目的、弾  
 圧目的の調査・データをどう読むかという方法であ  
 る。この「方法」については、マルクスが『資本論』  
 で工場監督官報告の読み方として実践している古典  
 的な例があるが、これがデータの読み方の問題とし  
 て捉え直されることはマレであった。

これらの点に関連して、研究者と研究対象の関係  
 という問題が重要な課題となる。とくに、「寄せ場  
 学会は、「寄せ場」労働者の闘いと連帯を重要な柱  
 としている。研究者にとって研究の対象でありな  
 おかつ連帯する仲間でもあるというのは、どのように  
 すれば可能なことなのか。最も古典的な方法は、「党」  
 がこの両者を媒介するという方法だった。マルクス  
 主義は、理論と実践について、あるいは党員知識人



と党の活動家との関係について、あるいは党の公式イデオロギーと党員知識人の個別の判断の関連について無数の論争をつみ重ねてきた。しかし少なくともこの問題の決着はつけられていない。精神労働と肉体労働の分業の廃棄とか、グラムシ流の“有機的知識人”とか、言葉の上では様々な提起がなされても、具体的な運動論と組織論のレベルで、この問題は実践に移されることはまずなかったのではないか。

勿論「寄せ場学会」は、党ではない。だからマルクス主義の長い論争がこのまま「寄せ場学会」にも持ち

日本寄せ場学会△△・人事

(一九八八年度)

運営委員長 池田浩士

監事 青木秀男(今夏フィリピンより帰国予定)

事務局長 松浜哲成

運営委員

森反章夫・山中幸男(財政部)

中西昭雄・長井公彦・松繁逸夫・志村哲郎・中山幸雄

(広報・組織部)

布野修司・奥野勝久(事業部)

青木秀男・西澤晃彦・中根光敏・島和博・松繁逸夫・中山幸雄

(調査・資料部)

伊藤公彦・和田研三(国際部)

年報編集部

編集委員

加藤晴康(●)・小倉利丸(●)・風間竜次(●)・池田浩士・関野

・下田平裕身

(●印は運営委員兼任)

編集制作

柴田勝紀(●)・長井公彦(●)・川島尚巳・西澤晃彦(●)印同右

事務局

水嶋陽・川島尚巳・斎藤博之・前田昭彦・遠藤弘貴

・滝口博康・田中雄二(通信担当)

込まれることはないが、しかし、少なくともこの論争に対する一定程度の総括は必ず必要となるのではないか。しかも、寄せ場の運動を直接担っている人達と、私のような研究的な立場——あるいは「外部」といったらいいのか、うまい表現がみつからないが——の者とが常に一心同体で共同の歩調を合わせてゆけるとは限らない。運動に対して、水を差すような発言をせざるをえない場合があるかもしれないし、逆に運動の現場からの研究者への異論がでることもあるだろう。こうした論争の場を保証しつつなおかつ共同の作業をうみ出すにはどういう方法をとることが必要なのか、この問題を、マルクス主義や左翼の運動は必ずしも前向きに解決してこなかったという思いがある。

## 二、「労働者」というカテゴリーの

### 特殊歴史性

寄せ場労働者に対する差別の根源には、労働を徳とする倫理観と、この倫理観を支える、「所懸命真面目に働けば報いられる」というある種の幻想がある。この幻想が個人の能力というもうひとつの幻想と結びつけられて、学校制度(学歴がこうしたイデオロギーの再生産装置をなすことになる。こうした仕組みがひとたび成立してしまつと、貧困は個人の能力と怠惰の象徴とされ、差別されるものがあり方となる。富の源泉は労働にあるとする近代社会の価値観は、貧困とは「労働能力の劣る者」の象徴となる。朝から酒を飲み、定職にもつかず、住む場所さえ一定しない、そうした生き方は、労働倫理の強制される社会のなかで差別されるものの生き方となる。

寄せ場労働者は、こうしたイデオロギー装置が生み出す価値観の「負」の側を体現する。だから寄せ場労働者の解放、差別からの解放という課題は、労働者というカテゴリーに内在する労働倫理という価値観を解体することなくしては実現できないと思う。従来の労働運動がよって立つ基盤は、労働者の労働を資本の搾取から解放するという理念(現実の既成の労働運動は勿論この理念すら放棄している)に支えられているが、しかし労働者というカテゴリーじたいが資本主義によって生み出されてきたこと(『寄せ場』創刊号で私はこのことを不十分ながら指摘しようとしたのだが)をふまえれば、労働者というカテゴリーからの解放なくして搾取からの解放もないということである。「貧民」を様々なカテゴリーに分類し、管理してきた様に、現代の社会でも労働者を様々なカテゴリーに分類し、管理する。とりわけ職業も住所も特定しにくい寄せ場労働者は管理社会のなかではやっかいな存在である。ということは逆に寄せ場労働者の様々なライフスタイルのなかに、現代の社会体制、支配体制のアクセシブルも存在するということだ。いくら高度なコンピュータを利用して、情報管理しようとしても、そうしたデータの入力にみあう条件を備えていないことにはデータとして役に立たない(アンケート調査で、選択肢のなかの「その他」に「わからない」の項ばかりに○印がつくように)。こうした脱管理ネットワークの可能性が寄せ場労働者のライフスタイルそのものにはないか。こうした労働倫理をつきくずす生き方をどのようにして、市民社会に突きつけてゆけるか、毎朝郊外のベッドタウンから満員電車にゆられて通勤する「サラリーマン(労働者)諸君」に突きつけてゆけるか、これは運動の問題にとどまらず、思想的・理論的な課題でもある。(経済学)

秋期シンボなど今年度の活動方針の検討  
場所——大阪府同和地区総合

福祉センター(芦原橋下車)

中村尚司氏(インド・バンガラデシユ  
経済)の話「アジア人花嫁の商品化」

場所——東京女子大学講堂会議室(西荻窪下車)

どなたでもどうぞ

1987年度財政報告

I 収入	
会費	900,000円
(ただし、正会員168名、学生会員11名のところ)	
II 支出	
a, 第1回総会関係	20,000円
b, 『寄せ場学会通信』3回分	240,000円
c, 通信費	150,000円
d, 山谷調査関係	70,000円
e, 11.15シンボ関係	20,000円
f, 年報編集費	150,000円
g, その他雑費(北代など)	50,000円
h, 年報	
代金 1800円×0.8×178名	
送料 100名×240円	280,320円
小計	980,320円
III 差引	80,320円の赤字

(一) 調査の実施  
山谷の住民意識調査が一週間にわたり敢行された。回収率一五八で五一%の回収率で大成果と言えよう。調査員は学生が主であったが、この調査実施により若手メンバーが事務局に結集するようになったという側面効果も大であった。なお、アンケート作成直前から会員何名かの間に激論も聞かれ、要するに本学会の建ち上りに最初に寄与した大事業であった。

(二) シンボジウム  
結成記念と称し大阪で開催。事実上、本学会の大阪大会といった雰囲気のもとに、準備がやや遅

(三) 年報『寄せ場』  
室々二四〇ページ、厚さ一六ミリ、論文7本、調査2本、研究ノート1本、合評座談会1本その他という内容大充実の一冊がついに刊行された。初め年2回という考えであったが無理ということに軌道修正した。表紙デザインや本文カットなど専門の絵描きに無料で書いてもらい、版元には多大なリスクを賭けて本作り(印刷・製本など)に入ってもらい、筆者は稿料なし、という絶大な協力で初めて成った。内容における批判——反批判を経て、「寄せ場学」確立のためさらに歩を進めたいものだ。(事務局長・松沢哲成)

1988年度予算

I 収入	
会費	1,047,000円
(正会員169名、学生会員11名として)	
II 支出	
a, 第2回総会関係	30,000円
b, 『寄せ場学会通信』4回分	160,000円
c, 通信費(ハ3回、封書4回)	64,800円
d, 山谷調査関係(続き)	20,000円
e, 釜ヶ崎・秋期発表会/大シンボ	60,000円
f, 年報編集・制作費	120,000円
g, 雑費	50,000円
h, 年報	2,000円として
代金 180名+50名(贈)	
送料 50名×240円	380,000円
i, 支部活動費(8万円×2)	160,000円
小計	1,044,800円
III 差引	2,200円の黒字の予定(1)

(一) 東・西2支部の創立  
6/7月頃から2つの支部の活動が開始された。どちらも定期的な会合をもつまでには至らなかったが、東日本支部の例会での研究発表(下田平・松沢)が年報に載ったり、西日本支部中心の釜ヶ崎労働ゼミが意義深くかちとられるなど、緒には続いた。

(二) 調査の実施  
山谷の住民意識調査が一週間にわたり敢行された。回収率一五八で五一%の回収率で大成果と言えよう。調査員は学生が主であったが、この調査実施により若手メンバーが事務局に結集するようになったという側面効果も大であった。なお、アンケート作成直前から会員何名かの間に激論も聞かれ、要するに本学会の建ち上りに最初に寄与した大事業であった。

(三) シンボジウム  
結成記念と称し大阪で開催。事実上、本学会の大阪大会といった雰囲気のもとに、準備がやや遅

(四) 『寄せ場学会通信』  
予定では4回出したかったのだが、3回に止まった。しかし、総会・シンボ・マニラと越冬という内容はそれなりにずっしり、形式面では美麗でとくに地方在住会員などからは評判が良かったようだ。今後会員相互、事務局と会員間、などのコミュニケーションにより資するように努めたい。また、どしどし寄稿して頂きたい。

(五) 年報『寄せ場』  
室々二四〇ページ、厚さ一六ミリ、論文7本、調査2本、研究ノート1本、合評座談会1本その他という内容大充実の一冊がついに刊行された。初め年2回という考えであったが無理ということに軌道修正した。表紙デザインや本文カットなど専門の絵描きに無料で書いてもらい、版元には多大なリスクを賭けて本作り(印刷・製本など)に入ってもらい、筆者は稿料なし、という絶大な協力で初めて成った。内容における批判——反批判を経て、「寄せ場学」確立のためさらに歩を進めたいものだ。(事務局長・松沢哲成)